



青少年赤十字

賛助ひろしま

第23号
2018.3

青少年赤十字賛助奉仕団信条

- 1. 青少年赤十字の充実発展に協力奉仕する。
- 1. 赤十字思想の普及啓発に努め、平和な社会の実現に寄与する。
- 1. 志を同じくする人々と手を取りあい、研鑽に努める。

発行 広島県青少年赤十字賛助奉仕団 〒730-0052 広島市中区千田町2-5-64
 事務局 日本赤十字社広島県支部 TEL (082) 545-5011

青少年赤十字の活躍に寄せて

広島県教育委員会教育長

下崎邦明



青少年赤十字におかれましては、児童・生徒が赤十字の精神に基づき、世界の平和と人類の福祉に貢献できるよう、日常生活の中での実践活動を通じて、いのちと健康を大切にすること、地域社会や世界のために奉仕すること、世界の人々との友好親善の精神を育成することなどを目的として様々な活動を学校教育の中で展開されており、ことに、深く敬意を表します。

また、関係者の皆様方におかれましては、募金活動や救命救急法、防災授業の実施などを通して、平素から本県教育の充実に貢献していただいておりますとともに、加盟校におかれましては、「人道」という赤十字の理念のもと、子供たちの人間尊重の精神や社会の一員としての責任と自覚を養い、異なる文化や習慣を越えて世界の仲間と仲良く生きる力の育成に御尽力をいただき、感謝を申し上げます。

さて、県教育委員会では、「広島で学んで良かったと思える日本一の教育県の実現」を目指し、平成26年12月に広島版「『学びの変革』アクション・プラン」を策定し、学んだ知識を活用し、他者と協働して課題を解決することを重視した子供たちの「主体的な学び」を促す教育活動を推進しています。

加盟校のみなさんは、ボランティア活動や国際交

流などに取り組む中で、課題に「気付き」、課題解決の道筋を主体的に「考え」、仲間と協力して一歩ずつ「実行」することを学ばれており、このことは広島版「『学びの変革』アクション・プラン」でも目指している課題発見・解決学習と軌を一にするものです。今後もぜひ、「気づき、考え、実行する」力を自分たちの生活の中でも生かしながら、周りの人たちと共に生きることの大切さを広げていただきたいと思います。

青少年赤十字活動の更なる発展と加盟校の広がりに向け、皆様の御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

共に支える青少年赤十字

日本赤十字社広島県支部事務局長

泉水直



賛助奉仕団の皆様には、平素より青少年赤十字の普及・発展並びに赤十字事業へのご理解とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

青少年赤十字は、将来を担う青少年が赤十字を正しく理解し、進んで赤十字運動に参加することを通じて、世界の平和と人類の福祉に貢献できるように、日常生活の中で、望ましい人格と精神を自らつくりあげることが目的とした事業です。

こうした中で、「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」という三つの実践目標のもと、現在、広島県内では285校(園)が青少年赤十字に加盟し、延べ83、231人の児童・生徒が学校内でのボランティア活動や支部事業への参画など、様々な活動に取り組んでいます。

広島県支部では、人道的な価値観を自ら身につけ、行動することのできる青少年を育成する場として、毎年夏に開催する小・中・高校生対象のトレーニング・センター(宿泊型研修)や、「国際理解・親善」の具体的実践の機会として、日・韓青少年赤十字相互交流事業などを実施しておりますが、これらの事業の原動力となっているのが、賛助奉仕団をはじめとする指導者の皆様方からのご支援です。加えて、長年に渡り、研修等の指導スタッフとしてのご協力や、各学校を訪問しての事業への参加促進などにご尽力をいただいております。改めてその活動に心から感謝申し上げます。

「気づき、考え、実行する」という青少年赤十字の態度目標は、「生きる力を育む」という教育の目的にも合致しており、赤十字運動を後世に引き継いでいくためには、次代を担う青少年に赤十字理念の理解を、一層、広げ・深めていく必要があります。

当支部では、今後とも、青少年の育成を全力で支援して参りたいと考えておりますので、賛助奉仕団の皆様におかれましても、青少年育成における豊富な経験や知識を是非とも発揮していただくとともに、青少年赤十字の更なる発展に向け、引き続き、ご支

援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

(特別寄稿)

紛争予防と犠牲者の保護

日本赤十字国際人道研究センター

(日本赤十字広島看護大学)

研究員 角田敦彦



野球やサッカーなどのスポーツから将棋やオセロな

どのゲームにいたるまで、競い合うところには必ずルールが存在する。ルールを破って得点を重ねても勝ったことにはならないのである。

武力が衝突する戦争や紛争にも、やはり法的な規制(ルール)は存在する。その規制は、戦争そのものの違法性に関する議論すなわち開戦法規などに代表される *Jus ad bellum* (ユス・アド・ベルム) と呼ばれるものと、戦争の方法に規制を加えようとする国際人道法などの *Jus in bello* (ユス・イン・ベロ) と呼ばれるものとの二つに区分される。

では、これらは具体的にどのようなもので、どのような違いがあるのだろうか。前号で、国際人道法はそれ自体一つの条約や法律で成り立つものではなく、戦争や紛争犠牲者保護のためのジュネーブ諸条約等法規慣習の総称であると述べた。そして犠牲者保護のアプローチにより、ジュネーブ法と、戦闘方法や兵器の使用に規制を加えるハーグ法に区分される。

ジュネーブ法は、ジュネーブ諸条約とその追加議定書で構成され、戦闘に参加しない(しなくなった)個人を尊重、保護すること、およびそれらの活動に従事する赤十字のような人道支援機関等を局外中立のものとして保護することを目的としている。

他方、ハーグ法は戦闘時の敵害方法(武器の使用)の規制を目的として、被弾した人体に重大な苦痛を与えるダムダム弾禁止宣言や化学兵器などの使用を禁止する特定通常通常兵器禁止条約などが代表的である。

ジュネーブ法とハーグ法は、アプローチは違っているが戦争の適法性に対しては中立的であり、犠牲者はその理由を問わず一人の人間として保護されるが、国際人道法に対する重大な違反行為に対しては、集団への連帯責任などではなく、罪を犯した個人が処罰されつという点に注目である。

第二次世界大戦後成立された国際連合(国連)は、その憲章において国連及び加盟国に紛争の平和的解決を求めており、自衛と国際的な平和維持の目的以外で武力を行使することを禁じている。この点で、国連憲章は *Jus ad bellum* であり、その規定によって戦争自体を原則違法としている。つまり今日の世界には合法的な「戦争」というものは存在しないということになる。しかしながら、国連憲章に定める「自衛」「平和維持」といった例外規定は条件付きながら実質的に武力の行使を認め、これらの大義をかざした武力による犠牲者が後を絶たない。

さらに興味深いのは、国連憲章は戦争自体を違法

とするだけで、兵器（手段）については中立的な立場を貫いている。このことが、最近話題となっている核兵器の問題を複雑にしていると考えるのは筆者だけであろうか。

（実践報告）

「非認知能力を育てる保育活動」

〈青少年赤十字活動を通して〉

社会福祉法人光生会保育所ひかり学園

園長 垣内厚子

ひかり学園は昭和44年、熊野町で初めて児童福祉施設として開園しました。「筆仕事など働く女性の多い熊野町に保育園を」と現在の理事長の気づきがあったきっかけで開園され、赤十字活動にも故会長がとても熱心でここ熊野町で赤十字活動の輪を広げられたと伺っております。私自身ひかり学園でお世話になり、「青少年赤十字」という活動を知り、指導者研修や夏のトレセンにも参加しました。健康、安全、奉仕、国際理解、親善を子ども達に実践可能な活動とし日々の保育の中に取り込み、活動の中で自分で気づき、考え、感じた事を通じてまずは身近な人のお役にたつこと、ひいては世の中の人々に貢献できる人になっていける事を目標とし日々の保育で取り組んでいます。

ひかり学園での赤十字活動の取り組みとしては、5月中旬に「赤十字登録式」を行い青少年赤十字の



青少年赤十字登録式

一員となります。毎年、日本赤十字社の方にも参加の願いをし、臨席していただき記念式典では「エコ風船」を全員で飛ばします。今年度は賛助奉仕団の方々にも参加していただき「いとすぎ」の記念植樹を行いました。赤十字の起こり（赤十字が何故できたのか）、アンリ・デュナンについて、赤十字のマークについて、そして「こんな子どもになるよ！」と誓いのことばをもとに作りしました。

『一つ、私は丈夫な身体で元気な子どもになります』
『一つ、私は良い行いをしてみんなのお役にたちます』

『一つ、私は世界みんなとなかよくなれます』

この三つのちかいのことばを「赤十字の日」の朝の会で唱和します。この「誓いの言葉」については絵パネルを作り新学期当初子ども達に分かりやすく説明します。また、6月以降に10日を赤十字の日と決め一円玉募金を開始します。保護者にはお手紙を出し趣旨をお伝えします。これは決して強制ではありません。集まった募金は10月に年長児が園の代表として日本赤十字社広島県支部に園外保育を兼ね保護者と共に届けます。また、赤十字の県大会に参加し日頃の活動の発表をします。

1月には熊野町で「赤十字まつり」が開催されます。毎年土曜日に開催されるので土曜保育で登園する子ども達（幼児のみ）を引率し参加します。事前に保護者全員にもこの行事をお知らせしているので保護者と共に参加する園児もいます。年間の活動として順を追って書いていますが、日々の生活の中で活動している事もたくさんあります。

年長児は仕事活動として園周辺の掃き掃除、脱靴場の清掃、室内清掃（床拭き）、インコの世話、新学期には年少組の給食のお手伝いをします。園庭遊びでは小さいお友達を気遣いながら積極的に関わっている姿をたくさん見ることが出来ます。

昨今幼児教育の世界では「非認知能力」という言葉が取り上げられます。乳幼児期に大切なのは、心

を動かす多くの体験を通して、その中でやりたいことが生まれ思考錯誤しながらそれを最後までやり遂げる力を育んでいく。保育園の子ども達の「幼児期のおわりまでに育って欲しい姿」これはまさに青少年赤十字の態度目標である「気づき・考え・行動する」と合致するところでは、これからも赤十字活動を通じて、様々な学びを得て明日を担う子どもたちの健全育成を進めていきます。

(実践報告)

筒賀小学校における青少年赤十字防災教育の取り組み



安芸太田町立筒賀小学校
教諭 西廣直明

安芸太田町立筒賀小学校は、平成29年度の全校児童数34名、教職員十数名という、極小規模の学校である。中国山地西部の山あいに位置し、豊かな自然・文化・景観が、脈々と受け継がれている。

しかし、本校が立地するエリアは、土砂災害警戒区域に指定されており、校舎中央部は土砂災害警戒区域に、中央部から西側は土砂災害特別警戒区域となっている。また、平成28年7月2日の中国新聞に「M6.8以上 中国地方で50%」という記事が掲載された。すなわち、筒賀地域は、いつ何時土砂災害や地震などの災害が生起してもおかしくない状況

にあり、本校の児童はもとより、教職員、保護者、地域住民に至るまで、命を守り、つなぎ、育てるための、幅広い防災意識の涵養が重要であると言える。このことから、本校では、「防災教育」を、学校教育目標達成のための一つの柱とし、その推進にあたっては、JRC青少年赤十字の理念や、防災教育プログラムをベースとして取り組んでいくこととした。まず学校全体の風土作りとして、「掲示板」による「先見」を導入した。本校の子供達はすぐに人を頼る傾向にあったが、この掲示板の取り組みを通して、自分で「気づき」そして「考え」見通しを持つことの価値を体感することができた。こうした土台作り、学校風土作りと並行しつつ、本校で取り組んだ防災教育の内容は、次の3点である。



掲示板

1点目は、年間を通して機をとらえながら防災教室・避難訓練を実施し、青少年赤十字防災プログラム「まもるいのち ひろめるぼうさい」を活用して、命を守るための適切な行動の仕方を身に付けさせたことである。

また、2点目は、健康教育・食育の推進である。健康朝会、食育朝会を通して、また、各教科、特別活動とのリンクの中で、自分の身体を正しく知ることや食べることで「命をつなぐ」という意識を持たせている。

3点目は、防災キャンプの実施である。このキャンプは、名称を「龍頭キャンプ」とし、9月14日・15日の1泊2日、全校児童参加で実施した。基本的な生活スタイルとして、掲示板を活用した「先見」を重視し、龍頭峽や天上山の探索、食事作り、避難所シミュレーションを活用した寝所づくり、フィールドワーク等を行った。このキャンプを通して、子どもたちは、筒賀地域の自然実態について、自分で正しく感じ取り、災害発生の可能性と関連付けながら深く考え、協働的に生活をつくっていくことができた。

児童にアンケート調査を実施したところ、いざという時、対応できると回答した児童や、様々な災害への対処について、さらに身に付けたいと感じている児童が多く、児童の防災意識が高まってきていることが、成果として挙げられる。しかし、一方で地域、保護者へ防災意識の涵養に課題があるということが見えてきた。したがって、今後はこれまでの取

り組みの成果を引き継ぎながら、健康教育、食育はもとより、各教科、人権教育とも関連を図り、また、様々な形で保護者・地域を巻き込みながら全地域的な防災意識の涵養と高まりに効果的な取り組みを開発し、展開していきたい。



「まもるいのち ひろめるぼうさい」を使用した防災教室

(実践報告)

青少年赤十字を学校教育に生かす

広島市立井口中学校

教諭

瀧口純二



日本の学校教育の課題として、「いじめ」の問題を

どう解決していくかということがある。まず「いじめ」はなぜいけないのかと問われたとき、あなたはどうか答えるだろうか。いろいろな答え方があるだろうが、赤十字の理念から、明確に答えることができ。それは、「人間の命と尊厳」(人道)を傷つける行為だからいけないのだ。この答え方は、今やほとんどの国が赤十字加盟国である現状を考えると、全世界に通用するものだと思う。それでは、いじめを学校からなくすためにはどうすればいいか。それは、青少年赤十字の究極目標である「人道的な価値観を育成」し、その価値観に基づいて行動できる生徒を一人でも多く育成することである。

筆者は、今から20年ほど前に広島市立国泰寺中学校で青少年赤十字に出会い、青少年赤十字の理念を学びながら、特別活動(生徒会活動)の中で、青少年赤十字活動を生徒と共に実践してきた。現在の勤務校である井口中学校に赴任したのは、今から8年前のことである。当時、井口中学校は青少年赤十字未加盟校であった。校長先生と相談し、とりあえず、私の指導する放送部を加盟させることにした。そして、日赤広島県支部が主催する青少年赤十字トレセンや、広島県大会、日韓相互交流事業などに必ず生徒を参加させた。また、校内や街頭での募金活動も、大きな災害が起こるたびに実施し、集まったお金を日赤広島県支部に届けた。

また、地域でのボランティア活動にも積極的に参加し、その様子を放送部と共にドキュメンタリー番組にまとめた。それらはコンテストに出品したり、

校内放送で上映したり、公民館で上映会を開いたりした。そうした中で、執行部加盟、全校加盟と徐々に活動の幅を広げていき現在に至っている。本年度は、青少年赤十字広島県大会の会場校として、県内の青少年赤十字メンバーに、手作りのしおりを作って手渡し好評だった。

◇青少年赤十字が一人の生徒を成長させる

青少年赤十字活動は、一人一人の生徒に成長の機会を与えてくれる。ここでは、Aくんという執行部の生徒との関わりのエピソードを紹介したい。私が生徒会執行部の指導を担当することになったのは、4年前のことだ。生徒会執行部には、10人くらいの生徒が所属していて、さまざまな生徒会活動の企画、運営を教師の指導のもとで行う。その執行部の中に、司会担当のAくん(中3)がいた。彼は、どちらかというと自分に自信がないばかりか、からかいの対象にもなる生徒だった。担任の先生からの推薦で執行部に入ったのだそうだ。そして彼は、それ以降ずつといろいろな集会で司会を担当している。司会担当は月に1回ずつある生徒集会、学年集会、代議員会の司会をすることになっていた。

ところが、この司会という仕事がAくんにとって難関だったのだ。彼は人前でしゃべろうとすると、かならず言い間違えてしまう。簡単なフレーズを何回も間違える。滑舌にも課題があるのだが、スムーズに自分が考えてきた簡単な原稿を読めないのだ。毎回、全校朝会では言い間違えてしまう。私の前の担当者は「彼のポストが今までずっと司会をするこ

とに決まっています、今さら替えるというのも彼を傷つけるんじゃないかと思ひ、そのままにしているんです」と言う。新しく変わってきた先生は、「この学校の先生は寛容ですねえ」とAくんの司会ぶりを見て言われた。

私は、放送部の顧問をしていて部員達に滑舌のトレーニングをしたりしているので、彼が司会をする前に司会原稿をもとに、少し読む練習をさせたりしていたが、あまり効果がなかった。そこで、彼にはなんとかそのまま司会をやらせておいて、他の活動を彼とどんどんやっていく中で、彼を勇気づけていこうと考えた。

私は、青少年赤十字の実践目標の一つ「奉仕」を意識して、いろいろなボランティア活動を執行部に企画してもらい、やってみようことにした。放課後の公園清掃を4月、6月に、東日本大震災復興緑化募金（みどり資源機構主催）を校内で5月に、バルカン半島洪水復興支援募金（日本赤十字社主催）を校内と街頭で7月に行った。バルカン半島の募金ときは、校内放送用のPRビデオを放送部と合同で制作し、その中でAくんにも少し出演してもらった。しかし、そんな中で、どんな活動においても、彼がリーダーとして前面に立つことはなかった。

ところが、予想もしていなかったことが夏休みに起こった。生徒会執行部と放送部で、日赤広島県支部主催の「日韓相互交流プログラム」に参加することにしたのだ。1泊2日の日程で、県の北部にある小さな研修施設で、日韓の中高校生が交流会を開く。



海外助け合い募金活動

そこで、私は生徒会長とAくんに、パワーポイントを使って広島や自分たちの学校のことを、韓国の中高生の前で発表してもらおうことにしたのだ。

英語が得意な生徒会長には英語で発表してもらおうことにして、Aくんは、パソコンが得意だと聞いていたので、写真とハングルを使ってパワーポイントを作ってもらおうことにした。彼を勇気づけるチャンスである。彼がどんなパワーポイントを作ってくる

かなあと思っていたら、想像以上にハイレベルな作品を作ってきた。地図や写真を取り込んで、いろいろなエフェクトを使って、とても分かりやすく構成されていた。

そして、説明の文章は、すべてハングルだった。いったん日本語で作って、それをインターネットの翻訳ソフトを使ってハングルに換えたのだそうだ。まさか、ここまでやってくるとは思わなかった。「すごいね。こんな特技がAくんにはあるんだね」と私。交流会当日、他の執行部メンバーや放送部はダンスを披露した。いよいよ、生徒会長とAくんの発表だ。Aくんがスクリーンにパワーポイントを映し出し、生徒会長が英語でスピーチした。生徒会長のスピーチもとてもよかったのだが、Aくんの作ったパワーポイントも好評だった。韓国の先生によると、ハングルがとても正確だったのだそうだ。そのことをAくんに伝えた。「韓国の先生方がハングルがとても正確だったってほめていたよ」と私。Aくんはとてもうれしそうだった。「文化祭でも同じ内容で発表することにしよう」と私。「えっ」と彼は驚いていた。

そして、文化祭での発表を無事終えた。生徒会長とAくんの発表は、生徒達の感想文から判断して、全校生徒に大きなインパクトを与えたようだ。今までにない文化祭の発表だったからだ。それまで、司会という仕事で失敗ばかりしていたAくん。「自分は役に立つ能力がない」と思っていたかもしれない。しかし、今回の日韓交流と文化祭の発表によって、

「自分は役立つ能力がある」と思ってもらえていたとしたら、彼への勇気づけは成功したことになる。

それは、今後の彼の行動を観察すれば分かることだ。

◇Aくんの成長

それから時は過ぎて、現執行部の任期もあとわずかになった。「もう、現執行部での活動は終わりだなあ」と思っていたときのことだ。Aくんが私の所に来て、「先生、最後に何かボランティア活動をしたいんです。僕が今考えているのは、学校の前の公園の落ち葉清掃なんです」彼の初めての主体的な動きだ。「それはいいね。Aくんが企画してみてよ」と私。「分かりました」と彼。彼はやる気満々だ。

先生方にも了解を得て、12月のある日実施することにした。放課後約1時間程度の活動だ。ただ、この日は降水確率が広島では90%以上となっていた。天気がとても心配だった。前日の校内放送の時間に彼は放送室のマイクの前で短いスピーチをした。「明日の放課後、公園のボランティア清掃を行いたいと思います。この活動は、僕たち現執行部が行う最後の活動です。できるだけ多くの生徒のみなさんに参加していただけたらうれしいです」放送前に自分で何回も練習して、本番の放送では一度もいい間違えることなく、堂々とした放送だった。

当日、午前中は雨が降り続いていて、午後のボランティアは中止かなあと考えた。でも、彼が初めてのリーダーシップをとって行う活動だ。今日以外はどう放課後できる日はなかった。なんとか雨が止んでくれることを祈った。すると、奇跡的に午後から晴

れ間が見えてきた。「Aくん、今日はできるね」と私。Aくんはうれしそうだった。当日の校内放送で

「今日は予定通り、放課後、公園清掃を行います。参加する人は正門前に集合してください。たくさん参加お待ちしています」と彼。放課後、最初は集まりが少し悪く心配したが、他の執行部員の熱心な呼び込みで50〜60人のメンバーが集まった。集まった生徒の前に彼が立って、清掃のやり方を説明した。「今日はたくさんの人に集まってもらってありがとうございます。今日のご協力です。今日の清掃のやり方ですが・・・」

と実に堂々と説明した。清掃が始まった。公園に溜まった落ち葉を竹箒で集めて土のう袋に入れていった。前日、100枚の土のう袋を用意したのだが、参加者の意欲的な活動で、約1時間半後には、86袋が落ち葉でいっぱいになった。終わりの挨拶では、「今日は本当にありがとうございました。終わりました。ふだん部活で利用させてもらっている公園がとてもきれいになりました。これも参加してくれたみなさんの頑張りのおかげです。今日は本当にありがとうございました」参加者から拍手が起こった。次の日、地域の町内会長さんから、公園をきれいに掃除したことに對する感謝の電話が学校に入った。このことを私はAくんに伝えた。

◇最後の校内放送で

Aくんは、次の日、校内放送の原稿を用意してきた。放送室で彼は、「最近、全然言い間違えないんだよな」と、放送部の担当の生徒にうれしそうに話していた。そういえば、彼の言い間違いが最近は

あまり気にならなくなっていた。彼はいよいよマイクに向かって話し始めた。「昨日のボランティア活動へのご協力ありがとうございました。みなさんのおかげで公園がとてもきれいになりました。86袋の土のう袋が落ち葉でいっぱいになりました。来年1月からは新しい執行部がまたいろいろな活動を企画すると思います。新しい執行部になっても、みなさんのご協力よろしくお願いします」と彼。彼は一回だけ言い間違えをしたが、堂々と伝えたい内容をアウンスすることができた。

彼がアウンスを終えて廊下を歩いていると、他の先生から「おしかったねえ」と笑顔で声をかけられていた。彼は「またやっちゃいました」と笑顔で応えていた。

◇終わりに

Aくんの人道的な価値感が育成されたかどうかは、彼の今後の行動を観察しないと分からないが、高校に進学して、彼はやはり生徒会執行部に入って活動していると聞いた。中学時代の経験を高校でも生かしたいと話していた。

今回の新指導要領での教育目標は「資質・能力の育成」である。是非とも、人道的な価値感を前提にした「資質・能力の育成」を、青少年赤十字活動を通して育んでいけるように、現場での実践を重ねていきたいものである。

(実践報告)

「創造の短冊に込めた想いがこの伊達の地から繋がりますように」

全国高等学校総合文化祭（総文祭）宮城大会（参加報告）

広島市立舟入高等学校 2年 岡田千弥

温かい宮城の方言、全国の高校生の仲間たちと交わした熱い討論、現地で見て聞いてきたこと、おいしい特産物に綺麗な夜景、今でもさつきあつたことのように、さらさらと鮮明な思い出となっています。みやぎ総文祭は私にとって新たなスタートでした。

今年の夏、宮城県で行われた全国高等学校総合文化祭に4日間参加してきました。私は光栄なことに、開会式にも広島県の生徒代表として参加しました。去年の開催地であった広島県とは少し違った雰囲気、仙台市全体がみやぎ総文一色でした。開会式には皇太子様、佳子様もいらっしゃるということで、各都道府県の代表メンバーも緊張していました。開会式で、私たち代表生徒は県のPRをしました。広島は、『カープで平和がなくなぐ高校生の熱い思い』という文です。この後の、全員が一斉にペンライトを手に掲げ流れ星に見立てるといふ演出は、会場から感嘆の声があがるほど感動的でした。

そして何より、開催県の発表が心に残っています。演劇によって震災のことを伝える、伝えようという気持ち、強く私の心に響きました。まだ被害がなくなっていない、支援が必要なのだと実感しました。



フィールドワーク(松島)

ボランティア部門では、主に活動報告と、四つのコースに分かれてのフィールドワーク、研修会を行いました。それぞれの学校の特性を生かして行っている活動が多く、私たちの高校の特性とは何か、それを活かすことはできるかを考えさせられました。

フィールドワークでは、松島高校の方の案内で松島を観光した後、避難体験をし、「土地勘のない人の守り方」について考えました。ワークショップでは、他の高校の防災マップを作る、地域全体で避難

訓練を行うという活動を知り、防災対策のアドバイスを貰いました。他県ならではの視点にたくさん驚かされました。結果、私の班では「つながり」がキーワードになるという結論に至りました。同じ班の人と密な話し合いができ、今でも連絡を取るくらい仲が良いです。

今回の大会で私が強く感じたのは、人との出会いの大切さです。ボランティアの精神は、助け合いから生まれると思います。ボランティアの魅力とともに、必要性を実感できました。想いをつなぐ、優しさの輪を広げる、できることからする、の3つが大切です。私はこの全総文での出会い、アドバイスを参考に、少しずつ活動の幅を広げていきたいです。

(地域奉仕団の活動)

世羅町赤十字奉仕団活動報告

委員長 田中一裕

世羅町赤十字奉仕団は、10年前の平成20年9月26日に創立されました。会員は「世羅町災害ボランティア講座」修了生および赤十字奉仕団活動関係者や、地域ボランティア活動をされている方々に声をかけ会員になっていただき、設立当初は会員130余名でスタートしました。

これまでの活動は、平成22年7月世羅町甲山・川尻地区で発生した集中豪雨による土石流災害（死者1名）での家屋の土砂撤去作業。平成26年広島市安

佐南区の豪雨災害時には土砂撤去作業とともに、地元の梨園のご協力で持参した「豊水梨」を差し入れ、ました。各地から参加されたボランティアの方々に「美味しい世羅梨」と喜んでいただきました。また、平成28年の福山市豪雨災害にもボランティアとして被災家屋の片付け作業にもでかけています。

そして、地元の「福祉まつり」や「消防まつり」ではカレーやカボチャスープの炊き出し訓練を実施し、参加者の皆さんに試食をしていただきました。また、一昨年からはその材料のカボチャづくりにも取り組み、イベントで販売し、収益金の一部を日本赤十字社を通して豪雨災害や地震・大火の被災地へ募金させてもらっています。

また、会員は「世羅町ボランティアネットワーク」とタイアップし、毎年実施される災害ボランティア研修会にも参加して、避難所の開設やハイゼックスによる炊き出し訓練等も学んでいます。

これからの活動の問題点としては、会の設立から10年が経過して会員の高齢化により奉仕団やイベントへの参加者が減少していること（車を運転して出かけるにくくなった）、町内の各自治センターなどに自主防災組織が設立され、奉仕団と同じような活動（避難訓練・炊き出し訓練・救急法研修等）が実施されていること、等々活動内容を考えなければならぬということもできています。

しかしながら、最近各地で「かつて経験したことのないような災害」が頻発しています。「備えあれば憂いなし」の諺ではないのですが、「自助・共助・

公助」+「近助」の世羅町赤十字奉仕団として災害ボランティアや「喜んでもらえることが喜びとなる」ような活動を目指し、これからもアイデアを出しあいながら楽しく活動していきたいと思っています。是非ご協力をお願いいたします



災害支援活動(平成28年福山水害)

(賛助奉仕団員の活動)



青少年赤十字登録式
参加して
副委員長 山中章敬

4月10日海田西中学校で登録式が行われました。この登録式は、青少年赤十字(JRC)メンバーの意識向上を目的として、多くの青少年赤十字の加盟校で年度初めに行われています。

学校創立以来の加盟校の海田西中学校は、入学式の翌日に実施されています。その登録式に赤十字広島県支部、青少年赤十字賛助奉仕団の方も参加し話をさせていただきました。

青少年赤十字は、誰の心にもある「困った人がいればなんとかしよう」という赤十字の精神に基づき、日常生活の中で身の回りに困った人がいれば行動すること、さらにはより良い学校生活を送るにはどうしたら良いかを一人ひとりが考え行動できる人になりましょう。そのためには、態度目標「気づき、考え、実行しよう」を常に意識して行動しようという話をしました。新たにメンバーになった新一年生には青少年赤十字のバッジを授与しました。

海田西中学校は、学校創立以来の加盟校で、「あいさつ運動」「空き缶等散乱ごみ追放キャンペーン」「クリーンキャンペーン」など生徒会を中心に日常的に熱心に活動されています。学校経営計画の中には「めざす生徒像を「気づき考え実行できる生徒」

とするなど、学校全体の取り組みのなかに青少年赤十字の態度目標と重なるものがあり頼もしく感じました。

今年度も、数校の登録式に参加させていただきました。参加したどの学校も生徒会を中心として特色ある取り組みをされ、さらに頑張ろうと言う熱意を感じられ私たちも元気をいただきました。



地域における自主防災活動②
幹事 寺田 宣文

前回に引き続き、私が住んでいる有美地区振興会の平成29年度地域防災活動を紹介させていただきました。私たちが住む地域は、世羅町ハザードマップでも全体が土砂災害危険箇所、一部特別警戒区域に色取られています。年頭の役員会で、去年できなかった避難訓練をやってみることにしました。町の総務課と県の消防保安課と相談し、アドバイザー派遣をしていただくことになりました。

第1回防災訓練は6月4日に防災講習会を行いました。

「いっどこで何があるかわからない自然災害」
家の裏がくずれそうになったら！さあどう行動する！

3年前の広島市災害のような集中豪雨が有美の谷を襲ったらどうする。

と、銘打ち、最低でも各戸1名以上できるだけ多い参加をお願いし、多くの参加を得ました。自然災害について、広島県の現状や世羅町の現状を優しく丁寧に解説していただきながら、基本の知識と実践の大切さを学びました。

第2回防災学習は、予定通り11月5日に土砂災害避難訓練を行いました。

今回は土砂災害避難訓練を実施することとなりました。土砂災害・洪水ハザードマップでご存知の通り、有美地域全体が土砂災害警戒区域又は土砂災害特別警戒区域（黄色又は赤色に囲まれている区域）です。

つきましては、土砂災害の危険性がある時に命を守る行動ができるよう、多くの皆様の避難訓練への参加をお願いいたします。

● 訓練内容は次の通りです。

◎長雨または集中豪雨による土砂災害の発生が想定される。

◎班による集会所から、安全な経路を通り、第1次避難所（有美会館）へ避難する。

（タイムスケジュール）

08：00 役員、会館へ集合

08：30 避難準備情報及び避難所開設情報発表

（会長・役員から↓4つの班の班長へ↓緊急連絡網で班の家族へ）

「避難に時間を要する方や、避難行動要支援者の方は、早めに家から集会所へ避難してください。それ以外の方々は、すぐに避難できる準備をしてください」。

09：00 班の集会所から避難を開始

「ご自宅周辺の危険箇所を確認してください。避難経路で発生している危険箇所を確認してください」



1時避難場所に集合

09・30 第1次避難所（有美会館）に避難する。

全員、避難訓練終了になります。避難者の人数確認と報告。自宅周辺、避難経路の災害状況を報告。

10・00 避難訓練の反省会

自主防災アドバイザーによる指導講話。

11・00 終了

地域では初めての今回の自主防災学習会（避難訓練）では、多くの課題や改善点が出ました。それが次へつながるということをつよく感じました。行動記録や訓練に参加した方の意見をもとに、失敗したこと、戸惑ったこと、また、逆にうまく行ったことなどを参加者で話し合うことで、次の避難訓練の時には、こうしよう、ああしようという意見を記録に残しておくことができました。また、避難訓練は、うまく行かなくて当たり前と、アドバイザーさんから言われ、ホッとしました。うまく行かないからこそ訓練が必要なのです。

30年度は、災害時要援護者の家族と支援者の事前の話し合いと確認を行い、焦点を絞った避難訓練を実施することを決めています。

私は、赤十字の理念である「みんな人間同士」「苦しみを分かち合いともに助け合って生きていく」ことを頭の中に入れて、これからも地域防災の役員の任を全うしようと思います。機会がありましたらまた報告させていただきます。

救急法・水上安全法講習会を通して

副委員長 野田崇



日本赤十字社救急法指導員歴39年、

43年、水上安全法指導員歴39年、

幾多の講習をしてきました。救急法・水上安全法は「青少年赤十字の健康・安全プログラム」の根幹になるもので、万一時「一歩踏み出し、いのちと向き合う勇気」を求めます。

講習は、日常的には事故防止が重要な取り組みであり、事故防止活動の日常が万一時の行動に直結していることを伝えます。救助活動は、救助者の安全確保が最優先され、二次事故防止を防ぐことが重要だということをしつかり頭にたたき込みます。

一学期は、小学校PTAが夏休みのプール監視当番することもあって、水上安全講習が中心になります。プール監視に止まらず、子どもの水の事故防止にはたす保護者の役割を「一歩踏みとどまる理性」と表現して、救助者の二次事故防止は「救助する順を熟慮し身の安全を確保」し、救助活動をして欲しいことを強く求めています。

特に身内の水の救急の時「弟・妹が溺れて、兄・姉が助けに行行って二人とも帰らなかった」「子どもが溺れて親が助けに行行ったが親が帰らなかった」等々、二次事故が多く発生しています。だからこそ、「身の安全確保」を強調して講習しています。更に、子どもだけで遊びに行くとき「危ないところに行かない」・「事故が起きたら、大人を呼んで助けてもら

え」の声かけが子どもの二次事故を防ぐと伝えていきます。

中学・高校生には、十分な知識と技術はなくても「人道的価値観」を育む視点から「一歩踏み出し、命と向き合う勇気」が大切なことを伝えていきます。下級生の事故防止は上級生の役割が大きいこと、特に熱中症は1年生に多く発生していることから、水分補給の指示確認に上級生の果たす役割の大きいことを提起しています。

JRCは「健康・安全」プログラムを展開していますが、私は救急法・水上安全講習を通して健康・安全プログラムが、いのちと向き合う人道的価値観に接近する一つの手段に位置づけています。頃、成り行きで救急法・水上安全法指導員になりましたが、講習を通して受講者から学ぶことが多くありました。特に「人を助ける熱意」が受講者から伝わってくる時、「人道的価値観」はこの熱意なのだ、と、再確認しています。この熱意に触れたいから年間30〜60回の講習に参加しているのかもしれない。

小学校トレーニングセンター（報告）

副委員長 河戸 靖子



平成29年度JRC小学校ト

レーニングセンターは8月20

日（日）から2泊3日の日程で実施され、私も参加した。

初日は「仲間を作ろう」をテーマに、アイスブレイク、赤十字の誕生、健康安全、ホームルーム等を行った。

最近の児童の実態は、JRC活動の経験なしで県トレへ参加しているため、諸活動の目的やV・S活動についての理解がないままに参加しており、県トレでは初歩から導かなければならない。そうした難しさの中でスタッフの努力で、児童は目を追って能動的に動き、自主性が出てくる。

2日目は「みんなのために活躍しよう」をテーマに、JRCの活動、選択学習、フィールドワーク、国際理解プログラム等を実施していった。

特に、2日目の夜の「国際交流プログラム」の活動を記しておきたい。今回は二人の外部講師にお世話になった。

一人目は、東広島市立東西条小学校教諭の滝本耕平先生で、昨年トレセンスタッフであったが、今春からハワイ州との教員交流でオアフ島のミリラニアエナ小学校で教えておられる。滝本先生とインターネット・テレビで映像と音声でトレセンの児童との直接対話が行われた。まず、児童は興味津々となり活発なやりとりが続いた。オアフ島の町の様子やハワイの小学校の勉強などの質問が続出しとても意欲的であった。

もう一人は元ALITのオースティン先生であった。ハワイの文化、生活、遊びの紹介から、ウクレレ演奏、お土産に持ってきてくださった遊具遊びをして、児童は夢中になって取り組んだ。続いて、ハワイの

料理体験では、ハムとコンビーフの中間のような味のSPAMを、おむすびの上に押せたり、サンドにして焼いていただいた。夕食後なのに、全員、食べることに食べること。笑顔の絶えない楽しい交流会となった。



ハワイの料理体験

このように、今年の国際理解プログラムは、児童の興味関心を大いに喚起し、新聞づくりで、「ハワイ特集」コーナーを作った児童もいて思いで深く残っ

たようである。

3日目は「これからの活動を考える」をテーマに各自が「JRC新聞」を作ることであった。3日間の活動を通して、学校に帰って何をすればいいか、具体的に記述する大仕事である。この新聞は、一部が支部へ残り、その複写が児童の出身校へ送付されるというもので、児童は真剣に取り組んだ。小学校トレセンは、3日間ですばらしい成長を見せた。

賛助奉仕団に入団しました

河野和夫



私は中学校で長くJRC活動の指導をおこなってきました。折々考えたことを

述べてみたいと思います。

一 保育実習で得るもの
朝、保育園に向かう男子生徒の足取りが心なしか重く感じます。「何で俺が園児の世話を…」そう言わんばかりの顔で女子の後をついていきます。でも、帰ってきた男子の顔は違います。なんとも晴れやかな表情で帰ってくるではありませんか。

保育園は中3の理解を超えた世界です。知らない人に抱っこされてじっとしている園児なんていません。腕の中でジタバタする、体を反らす、悪戦苦闘しながら、彼らは園児の小さな手を放しませんでした。痛くないように、怖がらないように。

戸惑いながらあやし続ける彼らが得るものは何でしょう。「どんなに暴れても、このお兄ちゃん自身を落とさない」、100%の信頼で抱かれる園児たちはやりたい放題。彼らはかつて自分がしてもらったように、園児の無邪気な信頼を守りきりました。親しく感謝されて学校に帰ってきた彼ら。上気した顔に誇りが宿っているように見えたのは私だけでしょうか。

二 ロンドンの誇り

2012年ロンドン・オリンピック女子サッカーの表彰式が心に残っています。

なでしこジャパンは、熱戦の末に決勝でアメリカ合衆国に敗れました。彼女らの表情が画面いっぱいに映し出され、試合直後の落胆ぶりは痛々しいほどでした。驚いたのはその後です。なんと、表彰式でイレブンがそれぞれの肩に両手を乗せて入場してくるではありませんか。その表情やしぐさの晴れやかなこと。見ているこっちまで飛び上がりた気分になりました。

試合後の控え室で何があったのかわかりません。激しい落胆の後、どんな気持ちで表彰式に臨んだかなんて、想像するだけで失礼なことかもしれません。でも、しっかりと彼女たちの誇りは伝わってきたのです。育てるべきはこれだと思ったのを覚えていきます。

三 できることから始める

自尊心が希薄ゆえに、いじめや保身に走る卑しさを見聞きする昨今です。気が滅入るようなご時世に、

「ひよっとしたら人の役に立てるかもしれない」、そう思えることの価値は高いはず。誇りの源は共感です。生徒が人とかかわる感動体験をくぐって成長する姿を見てきたわたしの確信です。人は、ままならないことに立ち向かう姿を応援せずにいられないのです。坂中がその思いをさまざまに形にしようとしたとき、親身にお世話をいただいたのが日赤広島支部の担当者でした。感謝しています。

「自分にできることから始めよう」、賛助奉仕団に身を置いた大きな理由でもあります。

平成29年度青少年赤十字賛助奉仕団活動報告

幹事 寺田 宣文

- 4月4日 会計監査、第1回役員会
- 4月21日 広島県JRC賛助奉仕団総会
- 4月21日 JRC指導者協議会総会
- 5月3日 フラワーフェスティバル参加
- 5月10日 熊野ひかり学園（登録式、いとすぎ贈呈式と植樹）
- 6月21日 広島県赤十字奉仕団委員長会議
- 7月1・2日 JRC指導者研修会
- 7月5・6日 全国賛助奉仕団総会（東京）
- 8月17～19日 JRCトレセンスタッフ（中学校）

- 8月20～22日 JRCトレセンスタッフ（小学校・高校）
- 10月19・20日 JRC賛助奉仕団中四国ブロック協議会（松江市）
- 10月28日 JRC広島大会
- 1月12日 第1回機関紙編集会議
- 2月8日 第2回機関紙編集会議
- 2月16日 広島県JRC研究会
- 2月18日 広島県赤十字ボランティア研修会
- 3月27日 第2回役員会・会計監査・機関紙発送作業

○学校訪問等、

- ・県内の小中高校JRC加盟校の登録式に参加
保育園 1園、小学校 3校、中学校 8校
- ・地域奉仕団と協力して、JRC活動の普及

平成29年度青少年赤十字賛助奉仕団総会（報告）

幹事 采谷宣子



今年度の総会は、4月21日午前10時から日赤県支部において開催しました。

- 一 平成28年度事業及び会計報告について
- ・会計監査は、4月4日午前9時から日赤県支部にて行い、同日役員会で承認を得た後、総会に

において事業報告と合わせて会計報告も承認されました。

二 平成29年度事業計画及び予算について承認されました。

・ 前記の事案については総会后、団費請求書と総会資料を送付しました。

・ 本年度の総会時に、河野和夫、中村耕三、雲地和典、原田樹雄の4名が新しく仲間に加わって下さり、昨年度に引き続き活気づいております。

三 今年度行事等について

旅行など親睦を取り入れたものとするため、昨年度申し合わせ通り、中四国ブロック大会にできるだけ多く参加することを申し合わせました。

・ 夏のトレーニンングセンター、指導者協議会、県大会、各研修会等への参加、日赤県支部の活動に積極的に協力することを申し合わせました。

いとすぎプロジェクトについて

今年度のいとすぎの植樹は、熊野町ひかり保育園に送呈することにし、5月10日に団員5名がまいりました。

園庭には大きな飾り付けがし
てあり、登録式が行われ、園歌、
赤十字の誓いの言葉、そして赤
十字を代表して日高賛助奉仕団
長が挨拶を行いました。



いとすぎ植樹に当たっては、植える場所を園の入り口に用意していただいております、石版に日付まで用意してありました。

移転間もない園舎を見学させていただきました。

園舎は大変工夫されています。例えば、年長、年中、年少、2歳組等は、それぞれ2組あり、組の中間にトイレがあり、仕切りをとると一組になるような構造になっていました。それが円形になっており、全員が中央の広場に集まれるようになっていました。そして、そこに凸形のガラスがあり、そこから調理している人たちの仕事ぶりを園児が見学できるようになっていました。

教育活動については、前述の園長先生の掲載に替えます。



園児による植樹

平成29年度中国・四国ブロック青少年赤十字賛助奉仕団連絡協議会・研修会（島根大会）

団員 原田 樹雄



中国・四国ブロック青少年赤十字賛助奉仕団活動の活

性化のために、研修を深め、団員相互の交流を図る研修会が、平成29年10月12・13日、松江市で開催されました。中国・四国各県から42名（うち広島県から6名）参加しました。

第1日

○記念講演

「小泉八雲くオープン・マインドで見た日本」

島根県立大学短期大学部教授 小泉凡先生

小泉先生は、小泉八雲の曾孫に当たられるということで、もともと東京育ちであるにもかかわらず、松江の地に根付かれ、小泉八雲を中心とした世界ネットワークを築かれている。八雲のオープン・マインドの形成と、オープン・マインドによる心の理解についてご講演をいただいた。小泉八雲が日本人妻から聞き取った「お化け」の話の原点は、彼が幼少時に過ごしたアイルランドで乳母から聞いた昔話に東洋・西洋の共通点を見いだしたのではないだろうかと言うことであった。「東洋と西洋の思想の融合が世界愛を育む」と、オープン・マインドで文化の

本質を見る姿勢を持つことの重要性を説いていたことを聞き、小泉八雲を通して人との出会いや異文化との出会いの大切さについて学ぶことができました。



○協議会

「各県賛助奉仕団の特色ある活動及び課題」

協議会では、事前アンケート資料を基に、1チーム数人で5グループでのディスカッションを行った。

テーマ1「わが県賛助奉仕団の特色ある活動について」、

テーマ2「わが県賛助奉仕団の悩みや問題点」

従来は各県の代表者が全体の場で状況説明や意見を言うという形式が多かったが、今回はグループ討議であったので、参加したメンバー全員に話す機会があり、参加のモチベーションが高まると同時に貴重な提案がなされたりした。

限られた時間の中でありながら、テーマに沿った各県独自の取り組みが発表され熱心な質問などが行われた。

特に加盟校の減少、団員の高齢化という課題があるなかで、近年の災害の状況から日赤版「防災プログラム」を生かした事例や高知県の南海トラフによる喫緊の取り組み事例など大いに多とするところであった

そして、学習指導要領に赤十字の文言があれば活動しやすいし、これから国際化・グローバル化と言われている中でこのままも状態では、海外でいざというときに対応できないとの提案があった。この件に関しては、各県委員長会議をもち、全国青少年赤十字賛助奉仕団会議に提案するという申し合わせをした。

第2日

○実践発表

「豊かな感性とたくましい人間力を持ち、未来を拓く生徒の育成―《気づき、考え、実行する》本校のJRC活移動の取り組み―」

島根県安来市立第三中学校 今岡一郎先生

実践発表は、平成27年度中国地区特別活動研究大会の研究指定校でもあった安来市立第三中学校の発表だった。JRC活動を柱に防災学習を進め、避難所設営体験学習まで、全校でプログラムした学習活動の展開について発表された。自然災害時の避難所における中学生の活躍が報道される中、組織的な学習は、生徒や地域にとって、この上ない財産になると思った。

○

小泉八雲記念館見学

前日記念講演をいただいた小泉凡氏が館長である小泉八雲記念館は、昨年にリニューアルしたもので、八雲が日本に来るまでの状況、そして、最も印象に残っているという松江時代、そして熊本・東京等の時代区分にしたがって展示されていた。小泉凡先生のご講演後の見学ということで、改めて、小泉八雲のグローバルな精神世界に接することができた。

私は、今年から賛助奉仕団に加入させていただいた。これまで、先輩からご支援をいただいたことに感謝し、今後は、団員としてJRC活動を支援していきたい。よろしくお願いいたします。



平成28年度青少年赤十字加盟概況
(加盟校数・加盟率)

平成28年度青少年赤十字加盟校数
(単位:園、所、校)

校種	全国		広島県	
	加盟校数	加盟率	加盟校数	加盟率
幼稚園	826		7	
保育園	836		29	
小学校	6,832	33.6%	135	27.4%
中学校	3,366	32.2%	88	32.5%
高等学校	1,852	37.2%	35	26.9%
特別支援校	145	12.9%	6	33.3%
合計	13,857	33.1%	300	29.0%

※加盟校数は、「平成27年度青少年赤十字の概況」から掲載

平成29年度広島県賛助奉仕団役員

- 委員長 日高敬司
- 副委員長 大木 昭、河戸靖子
- 幹事 野田 崇、山中章敬
- 監事 采谷宣子、寺田宣文
- 顧問 吉丸朝美、恵美勇作
- 蔭山龍児、光本涼子
- 曾山和彦、田中 博
- 塚本晃史、平越幸男
- 水野善親、横田二郎

編集後記

今号は、県教育長 下崎邦明様から寄稿をいただき、本機関誌を刊行以来初めてのことであります。改めてお礼を申し上げます。

今回は、幼・小・中・高校すべての校種と、連携を深めている地域奉仕団の報告を掲載しました。また、団員の中には地域防災に関わっている者も多数おり、その中の一部を掲載しました。

今年度の中四国ブロック大会は松江市で開催され、6名が参加しました。協議会での意見交換や、安来市の中学校の防災学習に関する実践発表など刺激を一杯もらいました。

また、今年度総会においては、新しく本会に入団された方が4名あり、いずれの方もこれまでJRC活動に深く関わり活動されてきた方で、やる気満々、本会も活気づいております。これからも団員の結束

をはかり、いとすぎの苗を学校に植樹する活動や、学校訪問、赤十字加盟登録式における講話など、赤十字活動の啓発に邁進したいと思っております。同時に、皆様の活動は機関紙を通してお伝えしてゆきますので、今後ともどしどしお寄せ下さるようよろしくお願いいたします。

○編集委員

- 大木 昭、曾山和彦、日高敬司、河戸靖子
- 、野田 崇、采谷宣子、寺田宣文、山中章敬
- 河野和夫



編集委員